

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 青木 啓将

論 文 題 目

物質性をめぐる人類学的研究—日本刀の事例における製作、
意味の生成、社会関係を中心に—

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学	教授	阿部 泰郎
委員	名古屋大学	准教授	東 賢太郎
委員	名古屋大学	准教授	梶原 義実
委員	南山大学	教授	後藤 明

論文審査の結果の要旨

別紙 1－2

【本論文の概要】

本論文は、現代日本社会における日本刀を事例として、その製作過程、意味の生成、それらをめぐる社会関係を明らかにするとともに、人間とモノ（objects）の相互交渉における動態的過程を精緻に分析し得る手法を追究し、従来の意味での物質文化研究の理論的射程を拡大しようとしたものである。本論文は、全体で 10 の章からなっている。

序章では、日本刀を対象としたこれまでの刀剣研究、より範囲を広げて鍛冶を扱った研究、さらに文化人類学における物質文化研究と芸術研究が批判的に再検討され、本論文の目的と構成が示される。その際、人間とモノとの間の相互交渉を記述、分析するうえで「物質性（materiality）」の関与に注目する必要性が指摘され、「物質性」をめぐる学説史の整理と概念規定がおこなわれる。

第 1 章では、日本刀の区分や種類、形状や模様の歴史的変容、鑑定士や刀剣商なども含めた日本刀の社会的意味の生成に関わる行為主体が概観された後、第 2 章においては近現代の日本において日本刀がどのように受容されてきたのか、明治期から昭和初期、軍刀生産期、太平洋戦争後、の三つの時期に分けて紹介される。第 3 章では、日本刀の生産と流通の現状が詳述され、製作者である刀匠の実態、工房と道具類、材料と製作過程、伝承される作風、日本刀の流通体制とその関係者、鑑賞美と実用性に配慮した刀匠たちの製作戦略などが明らかにされる。

第 4 章では、鑑賞対象としての日本刀の価値を左右する鑑識眼がどのように再生産され、製作者と鑑賞者の間で共有され続けているのか、その過程とそれを支える規則が詳述される。第 5 章では、その評価基準の内実、具体的には刃の切先、全体の姿、刃文、地肌、地鉄を対象に 30 種類以上の「刀ことば」が存在すること、評価の場においては従来受け継がれてきた古刀の評価基準が一定の規範となりつつも、ただ「きれい」な作例より「面白い」とされる作例が高く評価される傾向にあること、などが明らかにされる。

第 6 章では、製作者と愛好家の日本刀をめぐる科学的知識が検討され、彼らの一部は冶金や製鉄に関わる科学的知識の吸収に貪欲であるが、それらが日本刀の意味や価値の生成において決定的な影響をもつわけではなく、自然科学的知識の重要性は相対的に低いことが指摘される。第 7 章では、守り刀と刀剣奉納神事の事例が検討され、刀を神聖視したり、これに呪的な力を期待する際にも、その相互交渉には「物質性」が特有のかたちで介在していることが指摘される。第 8 章では、独自の作風と新しい市場の開拓をめざす刀匠たちの試みが紹介され、閉鎖的で保守的な「刀の世界」に身を置きつつも彼らが発揮する創造性に焦点が当てられる。

終章では、これまでの議論が総括され、結論が提示される。そして、「物質性」の関与とその際の人間の感性への注視が、静態的な単なるモノ研究を脱却し、人間とモノとの間の動態的な相互作用を視野に入れた記述、分析を志向するうえで一定の意義を有することがあらためて指摘される。

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

わが国でも物質文化研究および民具研究には相応の蓄積があるが、それらの多くは道具などの実用品を扱っており、本論文のように、美術品ないし骨董品としても評価と消費の対象となるモノを扱った研究は決して多くない。一方、刀剣研究や刀剣学の分野では日本刀を扱った研究はあるものの、それらは日本刀製作の技術的側面や歴史に目を向けがちであり、日本刀をめぐる意味や価値づけの問題は十分に論じられてこなかった。その背景のひとつとして、日本刀を扱う行為主体たちが閉鎖的かつ保守的な「界（Bourdieu 1992）」を形成しており、部外者にはそれへの接近が困難であったことがあげられる。

本論文は、岐阜県関市における10年以上におよぶフィールドワークにより、刀匠に弟子入りするとともに、刀をめぐる鑑識眼を養う「勉強会」に参加し、日本刀の製作過程、鑑賞と評価基準に関して数多くの新たな知見を提示している。とくに、30種類以上に及ぶ「刀ことば」に代表される独特の鑑識眼の内実を、実際に刀を手に取り、軽く振ってみたり光に当てて表面を透かして眺めたり、地肌を読むなど、モノとの具体的な相互交渉の過程を「物質性」に注目しつつ精緻に明らかにしている点は独創的である。本論文は、日本刀とその「界」に関する民族誌として他に類例のない先駆的業績であるが、これまでの物質文化研究に美的価値観をめぐる議論を導入した点も新しい試みであり、これらの点から高く評価できる。さらに本論文は、刀をめぐる意味と価値づけについて、明治期以降に発達した冶金学や製鉄に関する自然科学的知識との関連、古武道や居合道に用いられる場合の実用的側面、守り刀や刀剣奉納神事の事例など信仰の対象としての側面、「エヴァンゲリオンと日本刀展」の事例など新たな着想の源泉としての側面など、幅広い観点から検討している点も評価に値する。主題の性質を考慮し、全体に資料を視覚化して提示する工夫がなされている点も好ましい。

本論文は、近年の人類学において注目されている「物質性」を主題化しつつ、事例研究から得られた知見を、「物質性」をめぐる関係論的な視座を取り込んだ「新しい」物質文化研究の動向、とくにミラー、ジェル、インゴルドら英国の社会人類学者による議論、フランスのシェーン・オペラトワール論、これらと直接的、間接的に連動して展開している日本での議論のなかに位置づけて説得的に論を展開することに成功しており、物質文化研究の理論的射程を拡大するという本論文の目論見は一定程度、達成されたといつてよい。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。日本刀の意味や価値という点では、そのナショナリズムとの関係、神社神道との関連についての検討が重要であるが、この点はさらに深化の余地を残している。理論的にみれば、その結論は妥当だが、やや凡庸なものにとどまっている感も否めない。論述には冗長な箇所も散見される。しかし、これらは本論文の価値を大きく損なうものとはいえない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。